朝日新聞　２０２２年６月４日　朝刊　３１ページ　東京本社

868 てんでんこ　祈りの先に 5

「命をつなぐ」場所変わっても問い続ける

5月21日、宮城県の女川町まちなか交流館には、津波で犠牲・行方不明になった七十七銀行女川支店の行員たちの家族6人が集まっていた。自分たちでつくった慰霊のモニュメントを移すための話し合いだ。

祈りの場は、これまでも移転を繰り返してきた。

2012年5月に支店の解体が始まり、翌月には跡地にプランターを置いて「変わらぬ愛」が花言葉のキキョウを植えた。行方が分からない行員が8人いて、「ここが支店だよと、戻る場所が分かるように」。丹野美智子（当時54）を失った妹の礼子(64)と恵子(62)は振り返る。

慰霊のモニュメント移設について話し合う田村孝行さん(左)、弘美さん（中央）、高松康雄さん＝5月4日、宮城県女川町

長女絵美（当時26）が行方不明のままの成田博美(62)はクリスマスツリーも添えた。

その3年後。周辺のかさ上げ工事で花の移動を迫られ、100㍍ほど離れた空き地につくったのが今のモニュメントだ。

スーツ姿の男女をかたどり、「どんなに怖かっただろう　どんなに悔しかっただろう」「震災を教訓に職場の命守れ」とメッセージを添えた。毎年3月11日、多くの人々が集う。

ただ、町有地に立っているため、約3年前から町に撤去を求められるようになった。周辺の区画整理事業が終わり、今後は歩道として使うとの説明だ。

海沿いの広場への移設を町に求めたが受け入れてもらえず、高松康雄(65)が支店跡地近くの海沿いの土地を購入した。行方不明の妻祐子（当時47）を捜して海に潜り続けており、「土地を買えば、移すことはもうなくなる。妻のために何でもしてあげたい」と言う。

長男健太（当時25）を亡くした田村弘美(59)は「あの大惨事が忘れ去られてしまうことが怖い」。夫孝行(61)は「防災を巡る企業のあり方を問い続けなければいけない」と話す。

祈りの場があるから新しい出会いが生まれた。次も命をつなぐ場になることを願っている。

（福岡龍一郎）

◇

「祈りの先に」は終わります。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。